

9 8 9 9 8 9 8 9 7 8 9 7 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8 9 8 9 7 8 9 6 7 8 9 5 6 7 8 9 6 7 8 9 5 6 7 8 9 4 3 2 1 0

中村俊定文庫  
文庫 18  
647  
2

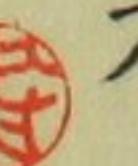
柳隱居士集

坤



佛詣第一義集之坤

鼻中庵三力著



水音大悟

古之や 梵苑へとひくもは音

轉る處實小能坐うり意休説くゆくと道解乃  
句悉く自得て心眼を開ふ事無く然るふ諦兼一義ゆ  
なれば蕉翁枯野のまゝ歩み歸れ一縷すとし日暮眼あふ  
在すりとく對印て微笑せよ因より智闇禪師繫作  
悟道絶偈曰

一聲小所知と是らず更小所治と候す处證跡を

声色の外威儀諸方達道の者尽言上を擇  
此意餘も似て音ハ水あり而辻ハ壁なり所ハ古之  
ニ義ニ義よ至りて一句成。其事一義を知れば。即ち胸へと  
知れ。孟子所謂其心と盡者ハ日。性を知る。其事と知  
則ハ天を知る。斯の事と學び。彷彿と聞く所となりての人  
第一義諦ともあは一物生て衆理と臭つて小五丈  
五引舟の事。今一つ見て是れ何ぞ。小舟りて故年  
もしく詔を集め。種々經理小處にてばゆ小舟の事  
事能く少ある。まことに於て吾が身に走る。五蘊皆  
空ふ。ありて又あるべきり也。所謂以心傳心。微意深言妙か

寺侍りぬ備又陶淵明が詩小菊を東籬の下に植え  
うす南山を見ゆる。磨大師が直指見性小会  
海の人陶達が号一ミヤ。少し何支歌く。侍紫天理別  
と備えい。さかる妙境を聞人のあづまき。其名事代  
沙よりうく腹は鳴る。且物をとどめん。うり匂者といひ  
了れ。よかやと古人も云々。誠ゆる。うれし詔ハ益々附向の効  
又肝要より自性と知る事を知り。よし。草木は季  
と違つて花笑實ら小同一。本も多代じて。勝り。虫も小  
鳴く。前のゆゑ。誰教や。と。然る。當是處。汝は自性の  
ちんともろもなし。おも。小行ば。も。代人。も。あわせ靈と

之ども色變多ひ識よ蘊き自身の事未と知りタカリ  
或れも知るを以てあながら小切といはば。かゝて多く行ふと  
少く知らう。大學は道ハ明徳と明小と云ひ人  
明徳則本性なり是を以て又見む程で又民と度せられ  
之と明徳と云ひ民を教ふまつても至善止む所を至る  
され真徳唯汝あるまじふもるハ可らず。大悟矣。でも其  
めく行ひ所うちざくら盛徳は君子もいひば又行ひ所  
善ふ止むも善ふあり。忽不善し。墨は武帝御祖太  
山開て曰咲普く寺と建僧と度一布施一肴と設佈  
功德行うや。祖のいく無功德。この言ふ事どう考へ

武帝とはあちこち登るよ始終

其角

はうち海を戲てよみえ。董仲舒が非と後悔せた。そ  
うり至るを止る多きを。からむら一度足りば。まづ減る。ま  
た根ハ勤々。詩歌俳諧の奥義は。ぬみ。す。鶯鶯。意陽謡  
舞傳授。琴絃。劍術。馬術。妙美も。是。性理。のう  
じ。文く。自信者ハ。人を。あく。を。信。モ。高。越。も。多。人。考。自  
鍵者ハ。人を。あく。を。經。少。外。孔。教。國。と。景。仰。詠。も  
仰。仰。士。路。思。惟。り。と。

名月三章

名月や波をあくらむおもすゝ

或説より身は皎きうを歎ドリつゝ。かづくも思ひまじ  
我無心となりてあるまじゆを失ぐしと等句毎をまよひ  
ふむ。がくのくゆハ本代の名句ト称す。ほゞせうが無心と  
評じう心を尋ねふを多き一めゆえ。何もなれや。一偏小  
心ゆく。かく無け見とくたひよ嫌ふす。馬祖大師の丈の  
鼻頭を撃る丈。痛声を拳。多ス。わく丈大悟。やうとゆり。者  
無能。てゆかく。うづ。又。おもす。うづ。物。ふくろ。は。被。ゆく  
と。評。せ。り。是。ハ。論。ど。ふ。か。す。非。セ。ル。て。名。句。と。り。ふ。性  
理。今。い。る。浅。う。ア。依。て。性。體。の。句。ハ。言。諸。を。を。解。き。

聞べ。爰すかく。廣河傳記。爰す。爰岩山。字。詩。で。ゆる。不  
は。範。之。宿。失。ぐ。と。俗。説。う。又。猿。河。傳。記。か。ぐ。と。て。山。を  
一。傍。き。う。や。ぐ。る。る。饅。頭。を。こ。う。食。く。す。か。く。と。と。供。ド。う。ま  
事。行。ふ。廣。河。傳。記。一。章。と。て。自。の。お。も。じ。他。を。え。じ。ア  
エ。を。う。え。じ。も。評。ど。り。妙。説。佳。き。と。但。心。を。主。つ。り。  
か。く。シ。ア。ト。言。外。の。迷。越。と。シ。テ。ハ。健。天。の。史。傳。矢。ぐ。も。あ。く。  
朱。文。公。が。歳。我。と。迎。す。鳴。琴。考。く。り。是。誰。が。愆。せ。く。ハ。え。る  
め。く。い。ば。く。小。ゆ。暮。春。と。り。と。月。日。が。風。燐。く。と。此  
次。又。黃。昏。無。常。の。偈。よ。此。已。過。命。即。裏。滅。も。の。火。み  
の。魚。の。み。ー。と。と。月。ハ。月。運。む。と。ソ。ア。時。よ。う。と。經。通。

情なり斯カラ侍とひづくは況と先ぐるとより行ふ。  
月を以も我も即今五移は一精一圓ふうて失ふるよ  
り面おほきり見るやうなり

くるくるかほす鴨桂淳林の筆 支考

かよふほぐる多終道の痕こそそく御通ハ遠タガ。あこ  
不易なり。清塵をもに。めぐらむるもむれゆけ  
もれまほうつらうむれいこうふ我方せよ。酒や  
まふくわくらわぐとぞと咲ひ切るア

見ゆとも廻り體翁の角 其角

星もえも人走馬體のまくふけてあらまど。因に所

ごう見えしは修業やらん。句のあ味はる人の物  
りす同氣相求らも主人公が失ふるをもア別れを  
失ふこととくわぬ。意情一致なり

其二

名目や事はよ松竹新

其角

此句一通してとは何のアから聞へ侍。其是もやれ  
妙吟。まうもあめ日月は新。小露つゝとぞふたまくもれと  
名目と至れ。松竹とあせするハ限くふ似。しじも是ハ  
形恭沙曲。歌あはば唱。歌とつるハ面。其智  
たゞく所有形る次物を極。佛の十法華喻

程子の所謂明鏡止水も  
是を以て人間の眞面目にして見鼻口にて  
鼻口ふたるまゝ人性より衆理を具てます  
應る所なり其本善の心徳を自得せしハはめ多  
窓ひ知りゆべからず

我亦是の目と鼻もまた花絛也　嵐雪  
是ち小町の画譲なり匂ひ眼鼻など花の色  
香絛つゝ。筆法以も丹青と云ふ目かくするわうる

書又やはれ書ふナラク筆もあらば生れぬまへ乃  
又モ亦筆もあらば古教の心とよ嘴ひかゞて是肉眼  
をもそぞらもの先づて文は用例みね新もつゝ。地上と  
あすみゞ小思ひづけぬく筆もよとハ晋子が良能ともす  
徒次月とうちる松も互に思葉も別ハキテ又は雲月と  
遼もハ忽ちもさく蹠もなし。晴れハ直に生ずるの  
月をも影と生るをもいだ。晴れハ直に生ずるの  
まねて我本初も那のやうどりくべ。ハキテ名月  
やまと觀想の清章もしがま代ひ多速と称る所す  
十縁生句は月は出づかずす津あをゆリ。すも月は東

と現どどんの對はる。同ち人の詩を高山と  
書ひと又儘かり。境ふ隨て傳びとる古事記  
あらゆる今く。

其三

名目や柳枝を空くゆく

嵐を

月ハチ江野印をとる。唯てこ。心とか森羅萬  
象も鷗びとり。とてらば。大室の月と衝きハ峰を。冬  
の月は。水うとうと見る月と見る。忽水中の月の。自性を  
従ふ。うねり。又知止るものある。唯てこれ  
の。うねり。又知止るものある。唯てこれ  
の。うねり。又知止るものある。唯てこれ

めー嵐叟は一章ハ西よ水中の明月。うりあすとなく。そ  
間なく。此の月と觀。ド恍然。す。水上よ。何と。手を  
か。又大室とも思ひ。唯其時。自然。月と一触なり。  
か。向。時。ハ。色。あ。小。善。と。も。の。有。べ。誠。は。此。神。の。凡。空。之  
め。あ。ド。唯。少。と。此。月。の。か。吹。か。後。次。風。か。り。ど。も  
代。念。的。見。と。も。と。い。水。す。ある。す。と。も。と。い。て。枝。の。枝。を  
空。く。吹。よ。る。後。と。思。ひ。が。と。も。る。鶴。的。の。心。を。も。り。其。の。時  
上。も。下。も。思。慮。か。別。ハ。な。い。も。左。是。月。は。大。室。平  
ゆ。わ。か。れ。夢。う。は。ま。月。と。い。だ。室。を。持。り。自。然。方。道。理  
す。う。聲。く。我。相。と。離。き。る。聲。く。も。る。心。ぐ。く。水。と。り。そ

一潭の月ナリ事ナ明白ナリ

海へ岸る粟や雪の浪聲音

其角

了しまる端的絶えうて  
念見て考へ。此外うくの  
説あつとこせよとしりてくに  
行ぎれどゆる至めは境も博く  
直ぐは故と温く新と知る。佛詔きくは流行され  
るは秦の時の大轉鑄とて方ひよまつてす。故と  
仰より聞くもの法なり。新とは我秦の本の教向  
たり。余が修業ナリせ法も復ふ斯也。

四脣一智

う多後ては衆も勢くや席は耳。其角  
画讀なり句意行ふたゞも著てて大いに感ア。有情  
もざて働く終は是什麼。まがるく少く或ハ強力或は  
微力。何とも其力と云ふ。何と云ふんと此一物と考  
ぐ。是無一物中乃一物と陽空の呼吸のくちあら  
言語のうの喻ヘキ。其呼吸も陽空も、うかるもと  
推どもさず。然どもあくびまで力のうと。又佛神乃  
カと一氣ナリ。とある。甚しそ甚か來を知る。然る  
東野一神道よ我身ハ則六根清淨ナリ。根清淨朱

故小立臘の神君安寧リ。五臘は朱衣也寧なるが故ニ  
天地乃神と同根なり。天地の神と同根うるハ我ハ  
是何也。此一言かくも諭を。や又般若灯諭。は  
何と佛と名く。一切法。轉倒せば真實よ覺了  
まく般よ佛と名く。諸佛電拂のや  
と説く。汝會得せ。や。亦念達ハ即ん丈度念悟  
せば即佛也。准て同一性を説く。もうち形  
ならぬゆか。可りて身を佛さ。あゆふ應じ。自由と矣  
どもはいれむ。わが業ナシ人。と。画る席。其耳と。頭  
な事陽火。小暖する。内情を述べ。海情。小手。めぐる一物を

吾誠小也。凡一章，如

翁示門人六章

移妻子シキ  
詞書シヨ  
小青潭ナガゼ  
大痴タクキ  
のノとト此シ游ヨウ了ヲは  
也ハやハ之ヒ大タひヨ。そもモもモあアり磨タマ大タマ師タマシ不シキ識シキとト合ハく如シ  
せセもモ詠ヨウ智チ誠セイもモ悟ガホ不シキ解カホなナハハ古コト詠ヨウ小コト問ム東タマ便ツバハチ乃ナ答ハシ西ヨウ  
よヨいイるやハ移シ妻キニニ壽シテとト。そソとトうウ向ム中コトニニ最モハヤ早サトリ悟ハシ  
もモうウとト心ハシりハシ。覺ハシまハシくハシぬハシむハシ一ハシ考ハシ乃ハシ心ハシ  
考ハシ乃ハシ心ハシ人ハシをハシ誠ハシ貴ハシ人ハシとト

あては實を包みや一の夢

其角

ある杭のあやせ俗法ありる有合せう中庸所詔隱  
きうち見えなく微なる頭キラカナシと其斯カニ人合ア  
鴉妻コトバ匂テラ合次カタ形カタ而ヒテ是終セザ人  
詞の花ふのまほりて仰首カクシごとく。もろま  
ーゼスハ人となげみ大言タゲンを放ち。能人シウジを侮シウフ痴愚チフ人  
なく譯讓ジヤツの心ハラハラ無性サウ。茶チャと吾ガと嘗ハシムと嘗ハシムすかく煙草タバコ  
とがコハダカ。居リて鳥トリ罵ハス羅漢ラカン。ちよくある  
道人ドウジンと汝タマハの名聞メイモンをふくらめ。その毛スヌ右拳ホンリ  
走ワウを起アゲ。衣食住シヨクヂウを奢りヨゴ。五節ゴセツ鷹塵オカヅを社中カヅ等

まどりやく邊ハタケにまゆマツモは遠アツシくやる。古翁カクウハ生スル屋ヤ龜ヨウ  
衣ヨロモ小核ヒノキ本ガサ主ミヤヤ店テンを鷲サカウとれレ。善エチ諸門人シメ示シメ。今又  
文モニ育モウ短才タタキ武タケル主ミヤヤに持ハサウりませナシ。す。まし。俗語カズち  
何ナシ。先ハシマて。之シテ先ハシマて。極ハシマ。逃キヤウ。其カタだらあカタ  
私ハツづき。少シテ。され。圓ハシミ基モトひなし。道シテ。多シテ。天命タミを  
辨ハシマ。此ハシマ。天命タミを。喜怒哀樂シヤウの情シテと與ハシマ。以ハシマ  
し。少シテ。庸人ヨウジンの及ハシマ。少シテ。夏ナツ。冬ハツ。署シテ  
知ハシマ。冬ハツ。署シテ。喜怒哀樂シヤウの情シテと與ハシマ。以ハシマ  
し。少シテ。是シテ。是シテ。是シテ。是シテ。是シテ。是シテ。是シテ。

未嘗の僧も衆生を導くに表一通アハ拂アキ。アレ事ヨ  
シ門乃初状のシテシテハ西方諸國主ムを憲シシテ  
シテシテ我家の輩も常小佛持トシテナリ。鼻祖が教ヘを  
慕シ心地モハ道其事小アリ。初不餘光モ一見  
識は立タリ也。セシムガシテシテ諸説師は  
無論ナリ家語ナ日無識と同シハ廁の中ニ居ジヤ  
衣を拂ギモシ時小真を聞ト。意惡モ少モ移リジ  
テ。口喝ル事ナラニナヨ行クモ移ナレバ善てシ  
實を心ナケ我意を離ヌモ多ナ時ハ孝弟忠信の本  
解モキナヅシテ清ひ也。道程小行シズヤ

其二

愚ふくくく荆をはうし嘗う耶  
生まぬまかしるゆゆあらども成長する小體にて七情  
小閣ノ中やも成歌よむしんを情よ歌。飲食過度一病  
生を亡。身を傷つもの。已小荆をはうし嘗う非とあざ  
そひふー身を初一念の嘗よ遙ひ愚よ入り荆を擱んで  
のち物を胸をかひとも何を及ジ。是七情小葛味ようが  
也。歌。醫書ト曰内七情よ犯され外へ事よ解ヒ。聖賢と  
ソドモ心を忍じたまう。うじと歩七情はめうち天よ雪盡風  
雨とす。うじと人よ身よもなきて叶ハざま。聖人ハ天地

病かく性を傷ひず。君子の病ひなれば小人の困はばとぞ。子路孔子が病ひを被る。子曰丘之徳不幸久し。元高神ぬの心を以て聖人め心とちこま。ハナリたす雲霧の病ひうれき日月ハ雲を汚しひて雨も降らず。常住不變平一也。昭然とあらうあるべく。喜怒哀樂愛惡欲をのく心の用ひて天小雲旁のかくか似て理ひうりて、かくかうれども或ハ葱りて肝を傷す。また忍て腎と傷み頗ひよく七情より覆ひ乍性を除き。見るく乃足ひ。百病發生してこそ才小害をあひてハ多心の用ひ。理せばも中道の程を妙す。ハ継今渴むたけで忍とも。其妙り

心上ふ止す。毒をうるゝ。うるゝがと甚苦心上ふ。まづらば物苦かくはやく済まず。此時ハ徇中は病ひハ有り。度小止觀。治癒病乃翁小心を急て和悦と。翁が衆病即差と云。黃帝雜忌。鬼も怪を見。怪うれど其怪自壞と云。是は邪神も有べ。妖怪もあべ。然もまぢ邪神も妖怪も。我らのからざり。而も別れるゆす。と被ひて走道のをぬ。荆をもとと忍びて氣を失ひ。跡中の移を高へ道と。やみ。空火はれ。小肝を潰す。山野の毒蠍。射傷。射傷少を人魂と。將蠍を。射傷ぐ化ふ。より其夜ふ。ある狐狸小はまき。ある。憂鬱を。既に六賛僧。擇。術。小化。と。通じ。通じよ。まき。をかく。你。あくは金銀衣。

錢を棄てせひと廢病起て革と水をかじる。眼を  
見る。皆是妙怪邪神の業を行はば已が心に顛倒す。  
斯法事一見事とはありぬ。たゞいわく。怪しお出でる。  
アハ即我心は變化たりと覺へ候ハシカ怪神と覺  
一神めでぶ一あはれ。我く妖怪と一體す。バ又行をもる  
半ば人や物の性をも。其怪自壞るとの謂也。  
主ふ又性とソムイモ是一理也。心は善惡心の二つ也。  
されば名をもとづく物ふそむうぬ性の之人也。ハ後形  
作を起す。而くは初に善なるをもふ。故に善あらばり悪も  
あはれ。世人心又性をも。即善挾とて動くる事無也。

うるなり。さては人善提も。ご聲ては後の第ひタおやふ  
思つる事也。都もえども善提も。涅槃も。般若  
えふ皆この心の移ろき。名もうき。人心ハとくらむ能く  
種々の念。小いがむと。一急激では活なび。鬼魅の心也  
鳥獸の心も。变化也。これら人面獸でも。況て。まゝ  
何れも死ても所謂石も。遂靈も成べ。以て人心。既  
せよおもへん。たゞいか。故ゆき。身小畜生。心の鬼也  
うち。ハつも善を拂て。一とび。ちかみえり。おとぞト  
スも願力。次第も。聖賢も。多び。とさう故。世理。殊  
少とき。て。五不處。ハ。も。大。荆。を。擱。し。電。ハ。セ。情。

物語集一卷之三

其三

花を吸ふ蛇あくひを友と見る

天地は萬物の神であれを吸ふ。故に大虫・小虫と喰ふて  
の心は保食神の心とまことに徳あるものなる天地の靈  
人であるべし。苟く自得と覺えり。去る者各自の示教威下  
即今花の種をもつて而も風としむ所へは人乃  
常情よりして必を吸ふ。蛇を愛てしるを戒め。蛇と云ふ  
者衆俗の常習せし爲の意より花を吸ふ。かくして  
一虫の命をほあぐる事なし。牛馬の血を吸ひ若くうどくし

佳なり雀ハ食ふ多尼鳥ナキ。其妙をくらひて食ふ事  
有まざれど。凡智は及ばず。而を乞ひてトモアヌ。友雀とは  
萬物一体の道理。うる済ひ。皆も雀も人間も一体の友とも  
なり。豈して友食う。うる済ひ。謂く者と人情の何う  
事にう受て自得と題せる。し晋子は言と諭す。う  
殊と憲と子猫と紙と。其角

是則鷹ハ小鳥成令ひ。鷹を喰ふの難い。うそと訓  
せむ。彼が命をほあぐ事能ひ。從て食ふも喰ふも鳥天地の  
物うねり。罪も済しむ。やのふうり。小わね命をうみて  
喫おうひ。人道よきもくあり。猫のみば紙と育む。やうひ

可也。蟬の命は却くんまでもあきらむべし。彼等もよ  
道理小ワレ。ざるゆ。小蟬ともふ物か。罪科がも。其れ一蟬  
トシ。ども人ハモモ中は靈也。小て化を具へ。人もまわす  
鷹セ。ばとく。ナタ。故み人を殺セ。モリ。及ばの至極。とひ  
教。ち。歎を蒼ふ。とも其の名程。モロク。し。鯉漁も。その  
口は。ア。す。ひ。ハ。ニ。ア。ト。更。キ。リ。理。ニ。當。ギ。ハ。茶。粟。も。食。次  
伯。夫。叔。翁。も。食。義。ニ。タ。ム。モ。ウ。ア。星。食。歎。と。同。一。かる  
人間。乃。道。キ。一。節。小。大。虫。ハ。小。虫。と。食。か。ま。の。と。お。か。て。は  
ち。ひ。よ。仁。の。道。を。生。ふ。べ。友。雀。の。句。ふ。四。ア。ド。合。モ。べ。

其四

蝶鳥ももくぬ花行。秋の室  
月桂の花と。うたる。普通。ち。く。又。月。と。約。で。花。く。つ  
ゆ。も。か。く。つ。ま。蓋。句。は。味。ち。化。愚。と。嫌。も。ふ。け。も。性。を。化。す  
べ。村。ね。う。とは。天。せ。よ。山。滿。の。代。立。ア。凡。世。人の。情。ハ。我。形。よ。ま。ど  
ひ。て。累。ゆ。も。あ。わ。ま。で。我。只。や。く。が。ん。ま。と。形。か。小。か。く。非。  
免。必。萬。累。は。風。の。赤。よ。は。有。萬。絶。特。變。と。悟。す。雪。也。石。火。乃  
う。げ。め。う。ら。よ。は。生。死。の。ち。素。と。う。我。え。よ。ぎ。小。或。時。ハ。禍。衣。お  
東。國。リ。お。る。代。か。し。明。月。の。西。山。よ。か。あ。く。と。う。げ。よ。ど。若。き。ば  
う。う。う。う。を。憂。ふ。う。し。も。又。心。の。用。き。と。ば。づ。後。こ。び。も。一。川。  
か。う。ま。う。ん。ひ。中。道。と。ゆ。多。風。雅。乃。肝。要。う。う。べ。

年々歲々花相似りとく。亦良はやこの八重桜も  
みうり豊かな桜もむすみ變へ行ゆ是則人同トか  
ざるも同然たり。或とぞ人形を以ての身ひとて人の力は及ばず  
葉を吹ふ終ひゆへと月ふ又夕花をあきぐら月よ又おもむ  
匂ひうを瓣の花はれをもたらする成一乘人は說を  
聞て曰形なほのばぬ生滅行どつも一種仙人としゆみ  
行御と行どて長生一世存とまく。答て白古音う天仙  
地仙は從う至靈丹と服一形と煉て天とあり。戸解して  
昇天自在の事甚何事しべのみ此仙も先あふ從歎同  
居てハ捲巻かがり依て親戚を棄て山林より立敷を

絶え行ぬ物を食へ。俄然う身不老とゆくと食ふ不仁  
の大敵端ごゑに於て死長命も無く死は滅せざんや  
雪裏を行ふ事も行を同一事。 墓坡

仁者ハいつらうとといちも足らず我知るがゆき。足らず  
知るがゆき縦令多難経往くも極煩惱の増長も計之  
又曰萬石苑小月中小河カツナ河カツナ上カツナ桂カツナ高カツナ五百丈ト  
一人有り姓カツナ吳カツナ少カツナ十カツナ仙カツナを多カツナ多カツナ少カツナ是如何  
答何人カツナ月カツナ中カツナ少カツナ十カツナ仙カツナを多カツナ多カツナ少カツナ是如何  
小見の眼カツナと聞カツナ也カツナが爲め教カツナ十六仙カツナを多カツナ多カツナ少カツナ不生不滅カツナ天心カツナをもとて立カツナる物カツナ。佛說カツナハ一切利天中千闇

浮樹ゆり一名を波利賀あらふ又ト龍樹もさう高ミ  
八百四十里樹陰月中小現ム。是か遠ミホアハ心  
眼を閉ス。日亦不見ル。極多妙知。能くは心言  
吐シたゞひも御身ノ福多矣。若リ。石を叩ヒ。羊と  
牛。あれ葉を接テ錢とまじ。何よ。せん等乞幻法也。  
近世法俗治。あくは斯のまゝ。異曲を或ウ。實を失ウ。ム  
得を初。詞を以テ。少人の能と云。そぞる教。ま  
則幻化。乃仙。まゝやじよ寫ト。ヤコゼイ。シ  
無支是貴人也。釋尊も阿羅々。加羅摩の心法。と云。豪  
とたてむひぬ。歷代の明王聖主も。尊く用ひ。より。唯教人で

天の命すまやなみ生。瀧安穂。まろ。

其五

物ハ。は唐寒。——秋の月

四十九年一字不説。ト宣ト。道理も。令之。西直。なるが  
より。西直。小着。て。風格。も。う。と。ち。一。似。も  
有。と。ほ。と。一。作。も。看。も。ひ。つ。く。が。り。や。く。わ。う。る。也。も  
角。も。う。べ。き。や。う。不。至。妙。の。境。ハ。言。う。と。離。きて。自。得  
せ。も。こ。人の。縁。と。道。く。の。う。れ。己。が。長。と。続。む。う。か。し。と。古。語  
の。う。語。と。句。の。か。ま。小。書。て。机。通。の。往。小。寫。く。ら。り。語。ハ。是。心。苗  
を。う。後。出。る。歌。素。有。文。脉。無。文。脉。無。文。脉。

小乞ひうなば。中乞ひは餘ての爲有文とらひ。趣意  
を説く。詞を説く。是も。是文とす。初學は無文解  
り入て。有文解小乞ひ。免まふ事と。而道を練乃  
族ハ山風游とも。水真く。徳也趣意も。風情も。もさき  
乃やふ思へり。那路小行。ごる也。山風とは。もさき。も  
翁が詞小行。向ふ。つづ。つづ。名も。所へ。無文解と  
も。投きし。捨べた。す。よ。に。桺ハ緑花ハ紅花  
も。ソリては。有文解のめ。桺不綠花ハ多紅と。示  
経小同。是則桺樹子モ。亦佛も。アヅの謂。シテ  
庭前。桺樹子の佛。も。を。宴。よ。そ。も。せ。ぞ。佛。小

行。行。心ね。人ハ。ま。ま。畠。小。行。こ。り。と。い。人。斯の  
が。死。の。輩。多。故。と。無。文。解。ど。多。い。入。と。又。や。も。ざ。  
更。き。と。一。己。は。か。別。小。ま。い。そ。と。自。得。せ。り。と。も。う。  
ま。から。妄。許。の。か。あ。う。と。ま。づ。も。皆。ひ。づ。と。お。く。

## 其六

我。よ。似。る。す。川。よ。ツ。モ。ー。生。茶。瓜。

此句。急。又。の。よ。ま。ゆ。條。切。も。ゆ。は。う。し。都。て。も。や。一  
躬。とい。で。し。其。中。と。わ。我。と。ふ。わ。ゆ。し。る。二。ツ。別。る。う。  
或。ハ。え。と。や。と。是。と。非。と。智。愚。の。れ。ひ。う。陽。ト。對  
て。陰。う。愚。小。對。て。善。け。う。我。よ。第。と。人。何。那。の。う。

自他の開けでハ四海之内あつ物一とはえども。親子と  
心をもてぬ財は世人ともいはまへ。は我意と  
離れてゆくわふ鷹の財は。草木國土一切おれ一躬も  
手をひきまべ。うへ。似る物を信よ凡を二つ。刻も  
ゆき。人を似てわむ。よし。身を家ふせよ。素凡  
と見るハ。ア愚鈍人なり。其愚る所を見るひてよく  
物義よ。善き生歛。小岸小運てす。口惜し。眉目かくら  
あやすき付く。心。かくら。貰おう。かくらよつた  
鶴。かくらと吉田は沙も書がたり。必ず思ひよ  
風乃よち。かくら。うも。かくら。ばとこ

初やうや あくまよ 見しる朝は あ 其角  
是みのひの示教よ對も 一通ハ、初音のわせまと。の  
さばあまと詮び候もども。さほのまうば大人いち赤まゆ心と  
失ひばとまうちやく雪も、うきうきあらば、赤ゆよもセ  
て三すび。わが身は、我顧もよらぬが成ア。おち草も  
門弟よおもて示す所はけり。と奉るものと都も  
四叟の引句を學ア。今をく幸來の意寔残悟ア  
○或問性理小かずひきハ、其句少て地の句小秀逸ハ、わざるや。  
答曰性軀は句すも未遠ハ、ましもすとぞも妄語よ。彦と  
えすすす又やの句すも甚深微妙を述る。一槩も

えふ。う吹く。問妻語。ふとんくい。いうかるを。えそや。答妻語。ふ  
きく。うとつまはむかた。雨あとのあはう。ド  
餅の花。ばく。神の枝よ。餅をつけ。餅むども。餅搗すり。  
もやすとあす。もづて。草あみ花。ハ日月ふね。まみがの  
敷ふ花。修業。まくは。もうち花。ハせんは。黒豆。レ。敵。あひ  
あはかびと。一枝。やく。せへゆき。ども。むち。おもと  
かづれ。先づ。柳。も。まき。し。餅とも。おも。おもと。  
おと。金。入。おと。火。かく。こと。お。印。持。え。も。お。持。  
餅。ち。わ。金。入。おと。火。かく。こと。お。印。持。え。も。お。持。  
おと。おと。火。かく。こと。お。印。持。え。も。お。持。

かくまうや。うとひあはかく、としきを妾語  
なり。櫛と板すよ雨露のあまふうびとえふわぬ。但  
少く水しひゆて。よく道理よ今と虚實自在  
もいぬ。あく、同あよわへる那きりせか事お付  
さぬする多きア問ひもとあやの匂は秀逸とふ。  
答曰おまをさす小鶴みわのうねと晋子うとうば  
翁筆トリス。又朝の日は花やふきにて。長閑は風云  
ちるまこと鶴は美かず。傍石もむする猪勢(ナラカ)ト  
喜びア又風をが。作りあひふをゆりすや姓の風つ  
誠(シシン)ト駕(カタ)ト様(ヨウ)をもん人情(ジヤウ)  
モウゴ

負室テイツがあきハトトコ花のう山カミ句ハ何シユ向也  
かく切字カキジもそぞうあくアグレモ末代フユキ易シタイッ  
限カギラを極推カタスルちアゲ又一字一作の扱アソカいセイ性辨セイギンの句も  
うちせの句アシガある前アヘン祖シヨダツ初月カニガツの忌シキと申す

注中トシナカと兼シムいとアシガ耐ハキタマ

嵐雪

三小すのせの句アシガとども意休隱ジンキナかて。ソドシニリと高理コウリ  
あかあアカアふとアカフたう。鄭カツのアシガ耐ハキタマとらアシガばの句アシガと  
答コタアシガアシガ道辨ドウギンの句アシガなまアシガば言アシガ味アシガとアシガ考アシガて。  
耐ハキタマとアシガ場カニも。俗アシガふ。あらへ身アシガは。くらみアシガま。ふほアシガの詞アシガ  
嵐アシガ雪アシガとアシガは。うアシガかとアシガどす。然アシガ一月アシガの面アシガも。たえよ

小靈レイゼン亦カク乃寒キン葉イロいとアシガ花ハナももあくアシガびとアシガ耐ハキタマて。す  
よアシガ謂セツし切カツる。室ジツ情ジギウも通アシガえ令カナづ。又コタ是アシガく。もとアシガく。也アシガ  
性辨セイギンは句アシガふとアシガふ。心ハラは。靈レイゼンも。よ向アシガて。師恩シエンとアシガ一捧イチボウ  
一條イチヂウの痕アト在アリ。今アシガ將アシガ言アシガ。問アシガ言アシガ。詰アシガるのうアシガふは。い  
そとアシガらアシガく。さ。然アシガハ聞アシガとアシガハ祖シヨダツかアシガて。景アシガ。是アシガは  
肩アシガも。すアシガれ。靈レイゼンも。本ホン來ライとアシガう。のきアシガハ即アシガ實ササガ相アシガて  
我ワガい。地アシガ景アシガ。す。み。り。ば。併アシガわ。き。ん。と。說アシガ。多。潤アシガ。を。も。く。も  
靈レイゼン亦カク乃アシガ。葉イロま。眼アシガ。と。ま。り。く。は。す。寒キン葉イロい。冬アシガ  
ま。ら。と。鬱アシガ的アシガ。不。足。供。く。る。妙。を。甚。優。切。弱。り。と。も。外  
り。う。く。う。花。と。風。く。お。靈。も。よ。行。す。め。眼。ま。が。え。後。の。う。こ

ねむ中とおう。室を參らむと。船にて答へて。是の事  
をほくまて一句となふ。其後す。後よ斯トモ仰れば。此  
事時無事無相も。在世経時を思ひ切て。妄言。因言  
手及げ。ぞくちゆも。がくよも。世尊一枚の花をやりて  
著る。大衆よりせよ。大迦葉も破形微笑せりと。あまも  
理を責めて。因ハ花微笑す。大迦葉も破形微笑せり。  
やかんを喰えど。小迦葉微笑と語は。キヅセリ。しそ  
をき。衆信の耳小鳴や。かたや。小。せの句が。まく  
まへ。かくせ。衆信の耳小鳴や。かたや。小。せの句が。まく  
と。まく。かくせ。衆信の句が秀逸。古今傳記。みぐ

独身。も甚愛を乞ん。とらふ。因ハおもて。ハ。何。ざ。ま  
ソ。ぞれめる。も。め。き。全軀ハ言語の。不。あ。欣。喜。ぶ。も。ろ  
人の道。も。人。は。道。の大。軀。ハ。も。め。き。が。幸。來。を。お。あ。り。  
を。め。き。が。幸。來。を。お。あ。り。因ハ神佛聖。徳。を。お。も。う。と。お。る。神  
佛聖の。お。も。う。じ。も。も。お。め。り。須。中。も。教。律。を。お。も。う。と。お。る。  
三思一言九思一行。一。も。お。も。う。じ。も。も。お。め。り。須。中。も。教。律。を。お。も。う。と。お。る。  
が。も。う。所。以。乃。法。好。り。や。れ。く。ふ。生。質。愚。か。く。て。こ。小。を  
學。ふ。事。わ。く。な。ば。今。更。す。道。を。聞。あ。ば。う。る。ま。う。め  
人。よ。お。も。う。じ。や。一。角。す。角。す。呻。今。も。う。め。タ。の。年。

誰。う。ち。り。を。參。ば。ま。ん。や。

布袋画讚

物ほや 傍はうちの月とじ

もやうふ山側の假意聲めども先づは布袋如萬  
法僧のうち乃身花を打ふ見とて甚かくはま通ふ  
窺ひ心と是と真理と違ひ小也マ裏の宣教も納む  
玉も。ソノ縁の句意悪く斯れがましくまん延す。故  
古池の句乃第一義諦をすまづ一はつ諦を自得せば  
即芭蕉直指門人と謂べ一毫も由我とりすがれど  
けり進むと曰否一智識は湯を浴て極ふ古池のゆゑども  
アヤリ直指の門人とちふるや。答て曰賞來か子若も

所と賞るも佛乞大勝一あ何とち無年朱一箇の  
妻を紹喜ひきまう改むとくに衣よ袖の深くるあく  
はの濯とお禊の出るがや。是全く禊事と極事、或  
が候ゆるよし。而雅よりあはむにがゆす。そゞ子が名を  
由我とハ何とぞや我より申て御掩てはますりども。ま  
其者我無我のうひも至らずがゆす必アリ形ハ土リ  
名を體すり即今布袋のふも名せかず勝る。さし  
名ハシル假の物よりば考ク万義理をすかばり古池乃  
め見るを窮るへや。此蓋見きうべし。然しも遙年志  
所ハ越る小松らましある。せよハ道をくみかちゆる

人を向く。やがてあらはるやいしん。傍へゆく。  
いとす。備ちて、和高を説教の化者とす。是も又入乃  
御つまきハ黙て思惟す。はく翁が仰講ハ性理小  
説ものとなば極くほくしきだもの。可笑もし。亦  
ひと花やうりもけり是城。は肉小肴てて也。向ふ  
道講の句ハ骨及び骨かくては肉も漸く。は肉もて  
骨も立てるなり。亦時々詩の節をもせり。一臘アハ。また行  
事も行つて。おもむろにうへて其手をひく。後の一臘アト  
ほん知れども道府裏廻ハ人毎ニ諭。句母よキの境を  
叫びたる所也。唯句小なると。あくびうと。おもむろにうへて

經宗法種とよ。念佛宗法高僧唱するがゆゑ。萬古と  
吐行傳力行る則の念。伐木す。小種。修善。戒を造る。不  
為をも。心を造る。や伐木。樹ハ事簡易アリ。シテ  
拂り去。至りソルアリ。体用。一つ致せどんハ首。アバ。根豫  
經。ふ昇る。得。ハ皆賢友の助。アリ。文。義。アリ。モ  
益。アリ。と。弘丈。モ。宣。アリ。然。此を。ふ。よ。諸。西。士。ハ。義。ア  
句。を。立。ア。テ。お。語。ア。自。己。の。心。を。立。ア。マ。ニ。う。ア。ア。業。株。と  
顧。ア。シ。一。事。を。立。ア。ナ。ま。み。う。ア。ア。業。株。と  
も。も。ぐ。う。ア。ジ。唯。理。屬。事。を。離。ア。ス。放。心。を。ホ。ラ。モ。ア  
シ。ル。運。モ。の。佳。趣。と。も。づ。う。め。う。ア。ナ。ふ。ゆ。

皇  
晉  
書

有一雅人曰三力舊長州人也弱冠而去鄉寓居於浪華遂止住于南都焉素嗜佛諦之道最志正風體嘗叩予柴扉數問禪頃著一書曰第一義集為其書也據櫛所膾炙人口芭蕉其角嵐雪野坡支考等之句意難通者以和解之往往

論諸家之所不及殆入玄理既是  
第一義寧借言詮乎然後學肇無  
筌何由得魚已得魚在忘筌而已  
予時閱此書傍有人見曰恰似讀  
禪書正恐齟齬於滑稽之意耶予  
答之曰蓋芭蕉翁本曾參見智識  
既閱一面目乃託意俳諧以自游  
戲耳不然則鄙俗妄語兒何其足

取無今此書以禪意諭之是其本  
色亦何怪哉世終不能起斯翁恨  
也後世淺俗奈解人正不可得客  
乃伏退以是為跋

大明癸卯歲春三月 相樂山樵子撰



寛政二庚戌年閏版  
社中藏



書肆

京都井筒屋庄兵衛

京都寺町通二条下ル町

野田治兵衛

江戸本石町十軒店

山崎金兵衛

大坂心齋福島順慶町

渋川清右衛門

